

八尾歴史物語

六十八巻

文化財と観光④ 信貴山への参詣 その二

江戸時代以来、盛んになった信貴山朝護孫子寺への参詣は、急峻な坂道が続き、徒歩ではさぞ大変だったでしょう。そうした人々が頼りにしたのが、道の傍らに立つ道標や丁石でした。

明治時代に入り日本の近代化が進み、全国各地に鉄道が敷設されていきました。明治22年(1889年)には、大阪鉄道(現・JR大和路線)が湊町駅(現・JR難波駅)から柏原駅まで開通し、初めて八尾市内を鉄道が通ることになりました。

同時に開設された八尾停車場(現・八尾駅)は、信貴山への参詣の最寄り駅となります。ここから東へ延びる恩智街道は、東高野街道と恩智神社を経て信貴山に至る参詣道として利用されました。現在も街道沿いに信貴山への道標が残っています。

参詣者は駅から徒歩や人力車、のちに自動車も利用し向かうようになっていますが、東高野街道の先は、江戸時代と同様徒歩で進むほかありませんでした。

そうした中、新たな鉄道、大

阪電気軌道(現・近畿日本鉄道)が誕生します。大阪電気軌道は大正3年(1914年)に上本町駅と奈良駅を一直線に結ぶ路線(現・近鉄奈良線)を開業しました。開業時の沿線案内に、瓢箪山停留場(現・瓢箪山駅)近くの名所として、市東北部の神立にある玉祖神社や高安梅林、千塚などが紹介されています。しかし、瓢箪山停留場から遠く離れた朝護孫子寺は掲載されていませんでした。

大阪電気軌道開業の翌年に大阪市内の自転車店が設置した水呑地蔵院への道標が大竹地区に残っています。当時普及しつつあった自転車で観光する人々もいたのかもしれませんが。(つづく)



▲大阪市内の自
転車店が立てた
近代の道標

問 観光・文化財課

TEL 924・8555

FAX 924・3995